

L・フョイエルバッハ日本語文献目録(年代順)

柴田隆行、編

凡 例

この文献目録は、の哲学者ルートヴィヒ・フョイエルバッハに関して、日本で日本語によって紹介された文献を収集記録した別冊の目録をただ年代順に並べ変えたものである。したがって、訳書も研究書も論文もすべてごちゃまぜになっているが、研究動向を知るには便利であると思われる。

- フョイエルバッハ(久松定弘訳)「道義学之原理」1887、博聞社
 久松定弘「靈魂実有の説に付て」1893、哲学雑誌 8(81)、p.1525-1537
 瀧川幸辰「カント哲学の学徒としてのフョイエルバッハ」1920年、法学論叢 4(3)
 フョイエルバッハ(恒藤恭訳)「哲学の改革に関する問題」1921、プレハーノフ『マルクス主義の根本命題』岩波書店
 マルクス(水谷長三郎訳)「フョイエルバッハ論」1922、我等 4(6)
 フョイエルバッハ(恒藤恭訳)「哲学の改革に関するテーゼ」1923、同志社論叢『マルクス主義の根本問題』巻末
 平井 新「マルクス社会学説の起源並に之対するヘーゲル、フョイエルバッハ、シュタイン及びブルードンの影響」1925、三田学会雑誌 19(3)
 哲学の始点 恒藤恭訳、1927.06、大調和 6月号
 マルクス(河上肇訳)「フョイエルバッハに関するテーゼ」1926、社会問題研究 71
 マルクス・エンゲルス(櫛田民蔵・森戸辰男訳)「独逸的観念形態第一編フョイエルバッハ論」1926、我等 8(5-6)
 フョイエルバッハ(恒藤恭訳)「ヘーゲル哲学の批判」1927.06-08、我等 6月号
 フョイエルバッハ(川村三男他訳)「身体と靈魂、肉体と精神の二元論に抗して」1928、河上肇編纂『マルキシズム叢書』(15)
 ヨードル(北村圭之介訳)『唯物論者フョイエルバッハ』1928、叢文閣
 「フョイエルバッハの哲学的形式過程」1929.10、新興科学の旗のもとに 10月号
 フョイエルバッハ(木暮浪夫訳)『キリスト教の本質』1929、共生閣(フョイエルバッハ著作集、第1巻)
 フョイエルバッハ(木暮浪夫訳)『キリスト教の本質 補遺』1929、共生閣(フョイエルバッハ著作集、第4巻)
 フョイエルバッハ(岡村幸二訳)『将来哲学の根本命題』1929、白揚社
 デボーリン(永田広志訳)『フョイエルバッハと其の哲学』1929、白揚社
 スティルネル(草間平作訳)『唯一者と其の所有上下』1929、岩波書店(岩波文庫)
 フョイエルバッハ(植村晋六訳)『将来の哲学の根本命題、他2』1930、岩波書店(岩波文庫)
 フョイエルバッハ(田村実訳)『宗教の本質』1930、白揚社
 大宮勇『「フョイエルバッハ論」に於けるヘーゲル』1930、ヘーゲル及弁証法研究 13
 佐藤賢順「フョイエルバッハの宗教論」1930.11、理想 20、p.110-119
 柴野恭堂「フョイエルバッハの人間学と宗教本質論」1930、宗教研究 7(6)
 フョイエルバッハ(平山哲二訳)『全訳 宗教の本質』1931、春陽堂
 フョイエルバッハ(奥一雄訳)『宗教の本質』1931、共生閣(フョイエルバッハ著作集、第2巻)
 フョイエルバッハ(関松悦郎・国互一訳)『唯心論と唯物論』1931、共生閣(フョイエルバッハ著作集、第4巻)
 フョイエルバッハ(牧野英二訳)『ヘーゲル哲学の批判』1931、共生閣(フョイエルバッハ著作集、第5巻)
 本多謙三「フョイエルバッハのヘーゲル批判——実存的弁証法への一寄与」1931、思想 113、p122-138
 伊達保美「フョイエルバッハの人間論」1931.09、宗教哲学研究、理想社出版部、p225-262
 佐藤賢順「フョイエルバッハの人間学」1931.10、理想 27、p.163-173
 フョイエルバッハ(桑田悟郎訳)『キリスト教の本質』1932、改造社(改造文庫)
 フョイエルバッハ(佐野文夫訳)『ヘーゲル哲学の批判』1933、岩波書店(岩波文庫)
 フョイエルバッハ(木暮浪夫訳)『キリスト教の本質』1933、南天堂出版部
 フョイエルバッハ(松本義雄訳)『近世哲学史(上)』1934、政経書院
 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』1934、岩波書店(岩波全書)
 小口偉一「フョイエルバッハの宗教哲学——Gregor Nüdling : Ludwig Feuerbachs Religionsphilosophie」1936.11、宗教研究 13(5)
 フョイエルバッハ(高松隆訳)『宗教の本質』1937、大都書房
 フョイエルバッハ(船山信一訳)『キリスト教の本質上下』1937、岩波書店(岩波文庫)
 伊達四郎『フョイエルバッハ』1939、弘文堂(西哲叢書)
 ケラー(伊藤武雄訳)『緑のハイネリヒ全4冊』1939-41、岩波書店(岩波文庫)
 フョイエルバッハ(樫山欽四郎訳)『将来の哲学の原理』1947、小石川書房

- フォイエルバッハ(中桐大有訳)『キリスト教の本質』1947、全国書房
 フォイエルバッハ(猪木正道訳)『死と不死について』1948、鬼怒書房
 フォイエルバッハ(暉峻凌三訳) 宗教の根拠としての「依存感」1948、知と行 5(6)、p.11-16
 フォイエルバッハ(中桐大有他訳)『フォイエルバッハ選集 1-2』1948-49、明窓書房
 野田弥三郎「フォイエルバッハ論 上下」1948.02-03、新しい世界 8-9
 宮本武之助「フォイエルバッハの宗教論について」1948、基督教文化 21、p.27-34
 森 信成「戦後唯物論について——F・A・ランゲのフォイエルバッハ解釈批判への序」1948、
 人文研究 5(5)、p.403-428
 佐久 登「フォイエルバッハ論綱解説 上中下」1948.08-10、新しい世界 13、14、p.50-54、15、p.55-61
 山本 信「フォイエルバッハ著、猪木正道訳『死と不死について』」1948.09、基督教文化 29
 ピオヴェザナ「フォイエルバッハとマルクス主義の無神論」1948-54、世紀 59、p.31-43
 島田 豊「人間学的唯物論の構造——フォイエルバッハ研究序論」1949、理論 3(11)、p.50-63
 フォイエルバッハ(船山信一訳)『唯心論と唯物論』1949、小石川書房
 加藤正男「フォイエルバッハの「反ホッブス論」——序文及第 1 章」1949.10、同志社法学 2、p.107-113
 フォイエルバッハ(栗林茂訳)『小論と箴言』1950、北隆館
 森 宏一「フォイエルバッハ」1950、本田・森監修『近代思想十二講』(ナウカ社)、p.168-188
 櫻山欽二郎「フォイエルバッハ論」1950.04、基督教文化 45、p.4-12
 立石 彰「『フォイエルバッハ論』誤訳表——出・藤川訳、野田訳、道瀬訳、佐野訳を検討する」
 1950.04、弁証法研究
 田中吉六「フォイエルバッハテーゼ——いかに研究すべきか」1950.04、弁証法研究
 梅本克己「唯物論と無神論——フォイエルバッハとニイチェに関連して」1950.06、理想 205、
 p.18-29
 森信成「フォイエルバッハ」1951、宗教と哲学・科学(柳田謙十郎等編)
 長瀬英三「フォイエルバッハの宗教批判」1951.05、京都学芸大学学報 A1、p.7-12
 平井俊彦「フォイエルバッハと市民革命——「三月革命」におけるドイツ精神史の源流 1、2」
 1952.03、53.10、経済論叢 69(3/4)、p.121-139、72(4)、p.288-307
 木本幸造「唯物論についての一考察——フォイエルバッハにおける唯物論と観念論とについての批
 判的学説」1952.06、経済学雑誌 26(6)、p.30-72
 鈴木 亨「フォイエルバッハにおける人間性と実存——近代思想と人間性」1952.06、大阪経大論
 集 4、p.51-66
 レーヴィット(柴田治三郎訳)『ヘーゲルからニーチェへ I・II』1952-53、岩波書店
 フォイエルバッハ(暉峻凌三訳)『宗教の本質上下』1953、創元社(創元文庫)
 フォイエルバッハ(梶田啓三郎訳)『唯心論と唯物論』1953、創元社(創元文庫)
 清水正徳「自然について——フォイエルバッハ・マルクス覚書」1953、近代
 堀口藤一「フォイエルバッハにおける「自然と人間」の関連について」1953、近代 4、p.16-21
 森 信成「戦後日本の哲学的修正主義——フォイエルバッハ研究序説」1953.05、07、思想 347、
 p.569-587、349、p.840-853
 小場瀬卓三「『フォイエルバッハ論』と私の青春」1953.07、文庫(岩波文庫の会) 22
 フォイエルバッハ(出隆訳)『キリスト教の本質』1954、河出書房(世界大思想全集)
 Gino K. Piovesana『フォイエルバッハとマルクス主義の無神論』1954、中央出版
 木本幸造「「上層で」のフォイエルバッハ」1954.02、経済学雑誌 30(1/2)、p.64-97
 森 信成「戦後唯物論について——F・A・ランゲのフォイエルバッハ解釈批判への序」1954.05、
 人文研究 5(5)
 フォイエルバッハ(真下信一訳)『近世哲学史上下』1955、河出書房(河出文庫)
 マルクス・エンゲルス(古在由重訳)『ドイツ・イデオロギー』1956、岩波書店(岩波文庫)
 レーニン(松村一人訳)『哲学ノート 2』1956、岩波書店(岩波文庫)
 ヴェ・ア・カルプシン(ソヴェト研究社協会編訳) カール・マルクスの世界観の形成(一八四二—
 四三年)における L. フォイエルバッハの役割について 1956.01、現代ソヴェト哲学 1、p.225-234
 信太正三「フォイエルバッハ人間学の問題と逆説性」1957.02、人文研究(神奈川大学)8、p.1-33
 鈴木貞之「エンゲルス『フォイエルバッハ論』」1957.07、哲学と教育(愛知学芸大学哲学会) 5、p.75-77
 城塚 登『フォイエルバッハ』1958、勁草書房(思想学説全書)
 長瀬英三「フォイエルバッハの人間観」1958、京都学芸大学紀要 A 19
 堀口藤一「フォイエルバッハの人間学」1958、近代 24
 良知 力「フォイエルバッハのスピノーザ批判について」1958.01、一橋論叢 39(1)、p.97-103
 良知 力「フォイエルバッハのヘーゲル批判によせて」1958.07、経済志林 26(3)、p.106-143
 清水正徳「フォイエルバッハ」1959、小松一郎編『講座西洋哲学史 中巻』(理想社)、p.159-169
 長瀬英三「人間学から見たフォイエルバッハの幸福論」1959、京都学芸大学紀要 A 20
 ヴェ・エム・クロチコフ(ソヴェト研究社協会編訳)「エル・フォイエルバッハとエヌ・ゲ・チェ
 ルヌィシェフスキーの倫理観における類似と相異(抄訳)」1959.06、現代ソヴェト哲学 4、p.236-243
 城塚 登「フォイエルバッハ」1959.02、理想 309、p.60-65

 エンゲルス(松村一人訳)『フォイエルバッハ論』1960、岩波書店(岩波文庫)
 田辺正英「宗教と人類愛——フォイエルバッハ、コント、ベルグソン」1960.12、研究紀要(新潟
 大学教育学部高田分校)5、p.14-27

- 梅本克己「人間論——マルクス主義における人間の問題」1961、三一書房
 ブーバー(児島洋訳)『人間とは何か』1961、理想社
 マルクーゼ(梶田、他訳)『理性と革命』1961、岩波書店
 栗林茂「人間学の一形態——フォイエルバッハの「神学の間人学への解消」に就いて」1961.09、
 慶応義塾大学日吉論文集 8、p.51-57
 長瀬英三「フォイエルバッハの人間観」1961.12、京都学芸大学紀要 A19、p.27-39
 フォイエルバッハ(梶田啓三郎訳)『唯心論と唯物論』1962、角川書店(角川文庫)
 藤巻和夫「ヘーゲルとフォイエルバッハにおける人間把握の問題」1962、倫理学年報 11、p.55-65
 長瀬英三「人間学から見たフォイエルバッハの幸福論」1962.03、京都学芸大学紀要 A20、p.19-28
 田原善郎「フォイエルバッハのルッター観」1962.09、理想 352、p.84-95
 長瀬英三「フォイエルバッハと不死の問題」1962.12、京都学芸大学紀要 A21、p.29-41
 フォイエルバッハ(伊藤武雄訳)『死と不死について』1963、筑摩書房(世界人生論全集)
 バルト(井上良雄訳)『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』1963、河出書房新社(世界思想教養全集)
 長瀬英三「フォイエルバッハのカント哲学批判」1963.03、京都学芸大学紀要 A 22
 フォイエルバッハ(出隆・大橋精夫訳)『キリスト教の本質』1964、河出書房新社(世界思想教養全集・実証の思想)
 ラートブルフ(菊地栄一・小堀桂一郎訳)『人と思想』(著作集第9巻) 1964、東京大学出版会
 小沼大八「L・フォイエルバッハに於ける人間生活の根底について」1964、哲学(広島哲学会)16
 長瀬英三「シュチルナーのフォイエルバッハ人間主義批判」1964.10 都学芸大学紀要 A 25
 フォイエルバッハ(船山信一訳)『唯心論と唯物論』1965、岩波書店(岩波文庫)
 フォイエルバッハ(船山信一訳)『キリスト教の本質上下改訳』1965、岩波書店(岩波文庫)
 河野健二、編『思想の歴史 9——マルクスと社会主義者』1965、平凡社
 孝橋正一「フォイエルバッハの神学批判と人間学的宗教」1965、社会問題研究 14(1)、p.1-29
 藤巻和夫「人間の類的本質——フォイエルバッハ」1965、淡野・城塚編『社会倫理の探究』(勁草書房)、p.161-181
 須田秀幸「フォイエルバッハの人間理解とその問題」1965.03、宗教研究 38(2)
 岩松繁俊「マルクス主義の源泉としてのフォイエルバッハ唯物論の確立」1965.04、経営と経済
 44(4)・45(1)、p.31-61
 藤巻和夫「フォイエルバッハにおける自然と人間」1965.08、理想 387、p.68-79
 中野雄策「遺稿「ドイツ・イデオロギー」第1巻第1篇(フォイエルバッハ)の新版について」1965.12、
 山口経済学雑誌 16(2)、p.30-59
 山本晴義「疎外論の歴史的考察——ヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクス」1965.12、理想
 良知 力「ドイツ社会思想史研究」1966、未来社
 レーヴィット(柴田治三郎・脇圭平・安藤英治訳)『ウェーバーとマルクス』1966、未来社
 小沼大八「神の人間化について」1966.03、筑紫女学園短期大学紀要 01、p.1-13
 富沢賢治「エゴイズムのイデオロギー的特質(2)——シュティルナーのエゴイズムとフォイエル
 バッハのヒューマニズム」1966.07、一橋論叢 56(2)
 飯田信夫「「フォイエルバッハ論」について——必読文献紹介、2」1966.10、社会主義 180、p.94-100
 須田秀幸「宗教における人間学的論拠(上)——フォイエルバッハ宗教哲学の批判」1966.12、郡山女
 子大学紀要 3、p.39-58
 フォイエルバッハ(松村一人・和田楽訳)『将来の哲学の根本命題』1967、岩波書店(岩波文庫)
 山本晴義『社会倫理思想史』1967、盛田書店
 レーヴィット(佐々木一義訳)『人間存在の倫理』1967、理想社
 市川 裕「ルードウィヒ・フォイエルバッハ思想の焦点」1967.01、世代 7、p.41-47
 末次 弘「フォイエルバッハにおける人間学の意図と限界」1967.09、哲学論文集 3、p.33-51
 上原英正「宗教批判と人間学——フォイエルバッハ『キリスト教の本質』における宗教批判の考察」
 1967.10、倫理学研究
 武井勇四郎「ドイツ古典哲学の言語観——フィヒテ、フンボルト、ヘーゲル、フォイエルバッハ」
 1967.11 岐阜経済大学論集 1(1)
 鈴木伸一「初期マルクスとフォイエルバッハ——『経済学・哲学手稿』をめぐって」1967.12、法
 文論叢
 須田秀幸「宗教における人間学的論拠(下)——フォイエルバッハ宗教哲学の批判」1967.12、郡山女
 子大学紀要 4、p.57-74
 牧野紀之「フォイエルバッハ・テーゼの一研究」1967.12、哲学誌 10、p.99-115
 水林澄雄「フォイエルバッハ書簡——第1部・習学時代(1820年～1828年)上下」1967.12、1968.12、
 明治学院論叢 132、p.75-102、144、p.71-87
 フォイエルバッハ(篠田一人・中桐大有・田中英三編訳)『フォイエルバッハ選集全3巻』1968-70、
 法律文化社
 大井 正『唯物史観の形成過程』1968、未来社
 長瀬英三「ヒュームの理神論克服——ヒュームとフォイエルバッハ」1968.03、京都教育大学紀要
 A 人文・社会
 伊達四郎『別離の論理—伊達四郎遺稿集』1969、大阪大学文学部哲学研究室
 山辺知紀「フォイエルバッハにおける個人確立の論理—1—フォイエルバッハの宗教批判の構造」

- 1969.01、経済論叢(京大)103(1)、p.36-52
山辺知紀「フォイエルバッハにおける個人確立の論理—2—フォイエルバッハの愛の共同体」
- 1969.03、経済論叢(京大)103(3)、p.52-69
辻 唯之「初期マルクス研究—1—フォイエルバッハの人間学と「フォイエルバッハ・テーゼ」」
- 1969.12、香川大学経済論叢 42(5)、p.52-62
- 城塚 登『若きマルクスの思想』1970、勁草書房
- 佐藤 誠「『三月前』期ドイツにおけるフォイエルバッハとマルクス」1970、経済研究(九州大学)25
- 小沼大八「個人・所有・愛—人間学の基本構造について」1970.02、愛媛大学教養部紀要 02、p.1-16
- 水林澄雄「フォイエルバッハ書簡第2部大学の教壇 1829年～1834年—上—」1970.03、明治学院論叢 163、p.47-68
- 大井 正「唯物史観の形成過程におけるマルクス著「ヘーゲル国法論の批判」(1843年)—ヘーゲルからマルクスにおけるフォイエルバッハの役割に対する一考察」1970.05、政経論叢 38(1/2)、p.1-42
- フォイエルバッハ(梶田啓三郎訳)『作家と人間』1971、勁草書房
- 船山信一『人間学的唯物論の立場と体系』1971、未来社
- ヴィルヘルム・ボーリン(斉藤信治・桑山政道訳)『フォイエルバッハ』1971、福村出版
- 寺田光雄「三月前=革命期におけるフォイエルバッハの問題」1971.01、思想 559、p63-78
- 宇都宮芳明「フォイエルバッハと人間の問題—「私」と「汝」の問題をめぐって」1971.02、北海道大学文学部紀要 19(2)、p.1-43
- 田畑 稔「フォイエルバッハの宗教批判」1971.03、待兼山論叢 4、p.1-21
- 池内健次「シュライエルマッヘル・シェリング・フォイエルバッハ—ドイツ思想家自筆集より」
- 1971.06、ピブリア 48、p.108-126
- 島田 豊「ルードヴィヒ・フォイエルバッハ(進歩と革命の思想—西洋編、10)」1971.10、前衛 330、p.137-184
- 山辺知紀「ヴィルヘルム・ボーリン著『フォイエルバッハ』」1971.12、季刊社会思想 1(4)
- 藤巻和夫「フォイエルバッハとマルクスにおける「自然」の概念—「精神」に対する「自然」の地位を中心に」1971.12、宇都宮大学教育学部紀要第1部 21、p63-72
- 八代祥吉「フォイエルバッハに触れて」1971.12、キリスト教論藻(松蔭女子学院大学キリスト教文化研究所) V、p89-101
- 城塚 登「新人間主義の哲学—疎外の克服は可能か」1972、日本放送出版協会
- 暉峻凌三「フォイエルバッハとアメリカ—書簡から」1972、季刊本の手帖 II、p4-5
- 本田喜代治・江口朴郎・浜林正夫編『進歩と革命の思想(西洋編下)』1972、新日本出版社
- 梅月睦子「フォイエルバッハにおける感性と汝」1972.03、お茶の水女子大学人文科学紀要 25(1)、p57-82
- 鈴木伸一「フィヒテの対立者としてのフォイエルバッハ」1972.03、倫理学年報 21、p.109-123
- 大島国雄「経営学と『主体の論理』—エンゲルス『フォイエルバッハ論』に関連して」1972.09、会計 102(3)
- 田畑 稔「純粹有と特定の有—端初をめぐるヘーゲル・フォイエルバッハ関係」1972.09-10、理想 472、p83-97、473、p81-95
- 榎木益栄「マルクスとフォイエルバッハ、1」1972.10、学園論集 21、p57-72
- フォイエルバッハ(船山信一訳)『フォイエルバッハ全集 全18巻』1973-76、福村出版
- シュッフエンハウエル(桑山政道訳)『フォイエルバッハと若きマルクス』1973、福村出版
- 小沼大八「神と人間との分裂について」1973.01、愛媛大学教養部紀要 5、p.1-42
- 安田忠郎「ルードヴィヒ・フォイエルバッハの「現実的人間学」—マルクスはフォイエルバッハの人間学を揚棄できたか、上」1973.02、慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 13、p65-77
- 梅月睦子「フォイエルバッハ人間学序説」1973.03、倫理学年報 22、p.137-150
- 榎木益栄「マルクスの学位論文—マルクスとフォイエルバッハ、2」1973.03、学園論集 22、p.1-25
- 中埜芳之「G. ケラーのフォイエルバッハ体験」1973.03、大阪大学教養部研究集録 21、p.109-127
- 良知 力「哲学と鏡—船山信一訳フォイエルバッハ全集によせて」1973.9.15、図書新聞 1229
- 本多修郎「フォイエルバッハにおける自然と物質」1973.07、科学と思想 9、p.119-129
- シュッフエンハウアー(桑山政道訳)「ルードヴィヒ・フォイエルバッハにおける唯物論と自然考察」1973.11、思想 593、p.123-140
- 寺崎俊輔「宗教批判の立脚点—フォイエルバッハの場合」1973.12、大谷学報 53(3)、p.17-22
- 匿名(川越修訳)「ルードヴィヒ・フォイエルバッハ [1844年]」1974、良知力編『資料ドイツ初期社会主義—義人同盟とヘーゲル左派』(平凡社)、p318-326
- カール・グリューン(川越修訳)「フォイエルバッハと社会主義」1974、良知力編『資料ドイツ初期社会主義—義人同盟とヘーゲル左派』(平凡社)、p380-399
- 城塚登「活動的な自然の概念—フォイエルバッハとマルクス」1974.06、実存主義 68、p36-42
- 鈴木伸一「フォイエルバッハの〈人間学〉における歴史構想—知の歴史適合性の問題」1974.06、理想 493、p90-103
- 泉 正義「唯物弁証法の諸問題 1 マルクス、エンゲルスのフォイエルバッハ批判をめぐって」
- 1974.07、八幡大学論集 25(1)
- 大井 正『マルクスとヘーゲル学派』1975、福村出版
- レーヴィット(麻生建訳)『ヘーゲルとヘーゲル左派』1975、未来社

- 半田秀男「類的存在としての人間、1-6」1975-85、人文研究(大阪市立大学文学部)27-3(p.155-172)、29-9(p.753-774)、30-5(p.327-345)、32-5(p.360-378)、34-7(p.315-322)
- 黒滝正昭「「経済学・哲学草稿」におけるマルクスの立場の一考察——ルートヴィヒ・フォイエルバッハとマルクスの関係」1975.02、宮城学院女子大学研究論文集 44、p.77-90
- 小沼大八「フォイエルバッハのルター観」1975.12、愛媛大学教養部紀要 8、p.39-53
- 岩淵慶一「フォイエルバッハと若きマルクス——エンゲルス説の批判的検討」1976、立正大学人文科学研究年報 14、p.10-19
- 河上睦子「他者の問題——フォイエルバッハを中心として」1976、相模女子大学紀要 40、p.43-51
- 小沼大八「フォイエルバッハの自然宗教観」1976、愛媛大学教養部紀要 9、p.1-15
- 寺田光雄「フォイエルバッハの変革表象——急進的共和主義者らとの関係をとおして」1976、埼玉大学紀要社会科学篇 24、p.59-70
- 大類純「現代中国思想から見たフォイエルバッハ哲学批判」1976.01、国士館大学人文学会紀要 8、p.17-32
- 安田忠郎「ルートヴィヒ・フォイエルバッハの「現実的人間学」——マルクスはフォイエルバッハの人間学を揚棄できたか——」1976.02、慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 16、p.65-71
- 豊田剛「フォイエルバッハにおける自然の問題」1976.03、倫理学研究(関西倫理学会) 6、p.33-43
- 亀山純生「フォイエルバッハ『キリスト教の本質』における「人間の本質」」1976.04、哲学論叢(京都大学哲学論叢刊行会) III、p.45-56
- ザス(山本啓訳)「マルクスに代わるフォイエルバッハ——論説「シュトラウスとフォイエルバッハの審判者としてのルター」の著者について」1976.04、情況
- 山本 啓「フォイエルバッハ——マルクス関係と新MEGA」1976.04、情況
- 服部健二「船山信一訳「フォイエルバッハ全集全十八巻」に寄せて」1976.06、立命館文学 371・372、p.510-515
- 鈴木伸一「フォイエルバッハの《人間学》における認識と実践の問題」1976.07、法文論叢 38、p.27-50
- 船山信一「フォイエルバッハにおけるヘーゲルと反ヘーゲル」1976.12、情況 101、p.232-247
- 大庭 健「共同存在に於ける主体性と時間性——フォイエルバッハ・シュティルナー論争の意義」1977、倫理学年報 26、p.87-99
- 沢井敏夫「シュティルナーの「自我」とフォイエルバッハの「人間」」1977.03、人文論叢 3・4(大阪市立大学大学院文学研究科) p.1-14
- 藤田友治「「ヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクス」の苦悩の概念について」1977.03、社会科学研究(大阪府下高等学校社会科学研究会) 19、p.17-24
- 別府芳雄「青年ヘーゲル学派とマルクス、3 フォイエルバッハ」1977.06、千葉敬愛経済大学研究論集 12、p.1-22
- 藤巻和夫「フォイエルバッハ」1977.09、飯島宗享編『現代一〇大哲学』(富士書店)、p.31-56
- 寺崎俊輔「フォイエルバッハの哲学——「キリスト教の本質」について」1977.10、立命館文学 386/390、p.1007-1017
- 北川直利「フォイエルバッハの「新しい哲学」について——「宗教」との連関において」1977.12、東北印度学宗教学会論集 4、p.67-84
- カメンカ(足立幸男訳)『フォイエルバッハの哲学』1978、紀伊国屋書店
- 小沼大八「ヘーゲル左派とL. フォイエルバッハ」1978、愛媛大学教養部紀要 11(1)、p.1-23
- 瀬戸 明「いわゆる「フォイエルバッハ・第一テーゼ」をめぐって」1978、国立音楽大学研究紀要 13、p.160-149
- 津田雅夫「現実的個人をめぐって——フォイエルバッハとシュティルナー」1978.05、哲学(日本哲学会)28、p.177-187
- 服部健二「フォイエルバッハにおける自然概念」1978.05、立命館文学 394/395、p.237-255
- 工藤喜作「フォイエルバッハの自然——特にスピノザとの関連において」1978.06、人文学研究所報(神奈川大学)12、p.1-20
- 滝沢武人「カール・バルトのフォイエルバッハ論」1978.09、基督教学(日本基督教学会北海道支部北海道基督教学会) 13、p.76-86
- キッパ(西村克彦訳)「近代刑法学の父フォイエルバッハ伝」1979、良書普及会
- 亀山純生「フォイエルバッハの感覚論とその人間学的基礎づけについて」1979.11、唯物論研究 1、p.242-260
- 服部健二「フォイエルバッハの自然哲学の構想と感性概念」1979.12、立命館文学 412/4、p.946-967
- 宇都宮芳明『人間の間と倫理』1980、以文社
- 河上睦子「フォイエルバッハの宗教批判の意味——シュティルナーへの反論をめぐって」1980、倫理学年報 29、p.71-84
- 本田玄伯「フォイエルバッハにおける類概念の展開」1980.04、社会科学論集(高知短期大学)39、p.1-23
- 服部 徹「フォイエルバッハの国家・共同体について」1980.06、立命館産業社会論集 24、p.1-23
- 本田玄伯「フォイエルバッハにおける我と汝」1980.09、哲学論文集 16、p.103-107
- 藤巻和夫「L・フォイエルバッハにおける近代理性主義批判」1980.12、宇都宮大学教育学部第1部 30、p.55-68
- 桑山政道『フォイエルバッハの思想』1981?、私家版
- ブラウン(桑山政道訳)『フォイエルバッハの人間論』1981、私家版

- ラヴィドヴィッツ(桑山政道訳)『フョイエルバッハとヘーゲル』1981、私家版
 喜多隆子「フョイエルバッハの死の思索」1981、待兼山論叢(大阪大学文学部)15、p.17-31
 斎藤 隆「ヘーゲルからフョイエルバッハへ——現代哲学の原点としてのヘーゲル哲学批判」
 1981.03、精神科学 20、p69-80
 服部健二「『純粋非理性批判』(KritikderreinenUnvernunft)としての『キリスト教の本質』」1981.12、
 立命館文学 437/438、p.1-17
 入江重吉・亀山純生・牧野広義『理性・感性・自由——近代哲学と倫理思想』1982、三和書房
 山之内 靖『現代世界の歴史的位相』1982、日本評論社
 河上睦子「『人間的な自然』について——フョイエルバッハに即して」1982、相模女子大学紀要 46、
 p51-63
 滝口清栄「M・シュティルナーにおける唯一者と連合の構想——青年ヘーゲル派批判とその意義」
 1982、法政大学大学院紀要 9、p.11-27
 服部健二「『キリスト教の本質』における「目的活動」と「類」との関係」1982.01、立命館文学 439/441、
 p33-48
 森 達也「今日のフョイエルバッハ研究の一つの見通し」1982.03、立正大学哲学・心理学紀要 8、
 p.1-17
 斎藤知正「食の哲学——フョイエルバッハと道元禅師」1982.05、仏教経済研究 11、p35-95
 喜多隆子「若きフョイエルバッハにおける「反ヘーゲルの批判」」1982.11、阪南論集社会科学編
 18(2)、p33-42
 河上睦子「人間と自然の問題」1982.12、『実存と倫理の探究——大島康正教授退官記念論集』(北
 樹出版)、p261-275
 藤巻和夫「L・フョイエルバッハの感性論」1982.12、宇都宮大学教育学部紀要第 1 部 32、p61-73
 宇都宮芳明『フョイエルバッハ——人と思想』1983、清水書院
 石塚正英『年表・三月革命人——急進派の思想と行動』1983、秀文社
 フック(小野八十吉訳)『ヘーゲルからマルクスへ』1983、御茶の水書房
 ラヴィドヴィッツ(桑山政道訳)『ルードヴィヒ・フョイエルバッハの哲学——起源と運命上下』
 1983-1992、新地書房
 松田賀孝「フョイエルバッハのマルクスの及ぼした影響について」1983.03、琉球大学経済研究 25、
 p.157-189
 森 達也「ルードヴィヒ・フョイエルバッハの「著作家と人間」について」1983.03、立正大学哲
 学・心理学紀要 9、p.15-26
 寺田光雄「青年マルクスとフョイエルバッハ」1983.04、宮本憲一他編『市民社会の思想』(御茶
 の水書房)
 山之内 靖「フョイエルバッハとマルクスの対話——市民社会の歴史貫通的規定性とは何か」
 1983.04-06、経済評論 32(4)-(6)
 河野次郎「フョイエルバッハの哲学改革」1983.05、白山思想(マルクス没後百周年特集号)、p67-77
 渡辺憲正「初期マルクスの社会理論と「フョイエルバッハ・テーゼ」」1983.05、一橋論叢 89(5)、
 p664-683
 喜多隆子「若きフョイエルバッハにおける「ライブニツの哲学」」1983.06、阪南論集社会科学編
 19(1)、p37-46
 本田玄伯「フョイエルバッハにおける理性と感性」1983.09、社会科学論集 46、p27-42
 喜多隆子「Zu Feuerbachs Schrift "Über die Vernunft"」1983.11、哲学論叢(大阪大学文学部哲学哲学史
 第二講座)13、p.1-17
 ブラウン(桑山政道訳)『フョイエルバッハの人間論』1984、新地書房
 船山信一「フョイエルバッハとマルクス及びヘーゲル——人間学的唯物論のために」
 1984.10-1985.02、季報唯物論研究 15、p22-26、16、p50-56
 森 達也「ルードヴィヒ・フョイエルバッハの「死と不死に関する思想」について」1984、立正
 大学哲学・心理学紀要 10、p7-29
 渡辺憲正「『フョイエルバッハ・テーゼ』六にかんする一解釈」1984.01、一橋論叢 91(1)、p52-75
 岡田猛「フョイエルバッハの身体論についての一考察」1984.12、九州体育学会抄録(第 33 回九
 州体育学会)
 藤巻和夫・池田成一「フョイエルバッハの想像力批判」1984.12、宇都宮大学教育学部紀要第 1 部 35、
 p41-52
 ショット(桑山政道訳)『若きフョイエルバッハの発展』1985、新地書房
 大井 正『ヘーゲル学派とキリスト教』1985、未来社
 亀山純生「フョイエルバッハの「感性的道徳」の基礎づけについて」1985、東京農工大学一般教
 育部紀要 22、p.1-14
 W・マール(滝口清栄訳)「W・マールによる民衆の読者のための、フリードリヒ・フョイエルバ
 ッハ『将来の宗教』1-3」1985.02-4、社会思想史の窓 9-10
 森 達也「ルードヴィヒ・フョイエルバッハの「神統記」について」1985.03、立正大学哲学・心
 理学紀要 11、p.1-14
 藤巻和夫「フョイエルバッハの「総体性」の哲学」1985.05、城塚登・濱井修編『ヘーゲル社会思
 想と現代』(東京大学出版会)、p227-241
 半田秀夫「ルードヴィヒ・フョイエルバッハ著『理性論』(1828年)について」1985.10、唯物論

研究年報 1985 年版

村上俊介「カール・グリュンのフョイエルバッハ論——グリュン『ルートヴィヒ・フョイエルバッハの哲学的特性の展開。その書簡と遺稿』(1874 年)を中心に」1985.11、専修大学北海道短期大学紀要 18

寺田光雄『内面形成の思想史——マルクスの思想性』1986、未来社

山之内 靖『社会科学の現在』1986、未来社

良知 力・廣松 渉、編『ヘーゲル左派論叢第 1 巻ドイツ・イデオロギー内部論争』1986、御茶の水書房

山之内靖『社会科学の現在』1986.02、未来社

本田玄伯「幸福と道徳——フョイエルバッハ倫理学の研究」1986.03、社会科学論集 51、p.1-24

喜多隆子「若きフョイエルバッハにおける『著作家と人間』」1986.03、倫理学研究(関西倫理学会) 16、p.13-23A4

鈴木伸一「フョイエルバッハのヘーゲル批判——「ヘーゲル哲学批判のために」における〈初端〉の問題」1986.05、文学部論叢 18、p43-69

ブルーノ・パウアー(山口祐弘訳)「ルートヴィヒ・フョイエルバッハの特性描写」1986.10、『ヘーゲル左派論叢第 1 巻 ドイツ・イデオロギー内部論争』(御茶の水書房)、p.115-120

亀山純生「フョイエルバッハの《感性的道徳》の基礎付けについて」1986.12、東京農工大学一般教育部紀要 22、p.1-14

良知 力『ヘーゲル左派と初期マルクス』1987、岩波書店

藤山嘉夫「フョイエルバッハにおける宗教批判の論理と「人間」——『キリスト教の本質』試読」1987、横浜市立大学論叢社会科学系列 38(1-3)、p.135-164

武田趙二郎「フョイエルバッハのヘーゲル批判」1987.03、東海大学紀要(沼津教養部) 14、p.1-11

井上周八「ヘーゲル、フョイエルバッハ、マルクス」1987.09、立教経済研究 41-2、p45-80

徳本正彦『政治学原理序説——全体的認識へむけて』1987.10、九州大学出版会

フョイエルバッハ(西村克彦訳)「フョイエルバッハの伝記的遺文に対する序言」(1852) 1988.11、警察研究 59(11)、p70-75

ビーダーマン(尼寺義弘訳)『フョイエルバッハ——思想と生涯』1988、花伝社

ブラウン(桑山政道訳)『フョイエルバッハの宗教哲学——宗教的なものの批判と容認』1988、新地書房

儀同 保「フョイエルバッハ随想」1988、社会文化法律センターニュース 100 号記念号

半田秀男「人間と自然——L・フョイエルバッハの場合」1988、人文研究(大阪市立大学文学部)40(4)p219-239

細谷 実「疎外理論の再考——フョイエルバッハをめぐって」1988、社会思想史研究 12、p.117-132

両角英郎「フョイエルバッハ——思想と生涯」ゲオルグ・ビーダーマン著・尼寺義弘訳 1988、阪南大学産業経済研究所報 18、p48-52

山口祐弘「フョイエルバッハにおける感覚的共同性——ヘーゲルからの脱却過程」1988.02、思想 764、p.112-127

村上隆夫『政治的な学としての倫理学』1988.03、未来社

富丘 聡「フョイエルバッハにおける『理性の現実化』について」1988.07、精神科学(日本大学哲学研究室)27、p41-50

柴田隆行「国際フョイエルバッハ協会設立される」1988.11、社会思想史の窓 54、p.11-12

寺田光雄「ミュンヘン大学所蔵 L・フョイエルバッハ遺稿目録」1988.11、埼玉大学紀要(社会科学編)36、p.1-5

滝口清栄「L・フョイエルバッハの思想的転回とシュティルナー」1988.12、社会思想史の窓 55、p21-32

フョイエルバッハ(西村克彦・川島健治訳)「フョイエルバッハ家の人たち」1989.6、警察研究 60(6)、p60-70

亀山純生「エンゲルスの宗教理解について」1989、多摩川の流れ、p.190-196

尼寺義弘『フョイエルバッハ』に関する資料 1989、阪南論集社会科学編 24(4)、p65-67

早山春生「フョイエルバッハにおける感性と現実——シュティルナーの『唯一者とその所有』への反論をめぐって」1989.02、教育思想(東北教育哲学教育史学会) 16、p47-58

桑山政道「フョイエルバッハの会」に想う——今なぜフョイエルバッハか 1989.03、社会思想史の窓 58、p23-28

柴田隆行「L・フョイエルバッハ日本語文献目録(1989 年 5 月 1 日現在)」1989.07、社会思想史の窓 62、p.11-18

藤巻和夫「国際フョイエルバッハ協会のこと」1989.07、社会思想史の窓 62、p7-10

船山信一「フョイエルバッハとの私のふれあい」1989.07、社会思想史の窓 62、p.1-6

滝口清栄「L・フョイエルバッハの思想転回とシュティルナー」1989.09、社会思想史研究 13、p.132-144

石塚正英「フョイエルバッハとフェティシズム——フョイエルバッハの会創立(1989.3)を記念して」1989.11、季報唯物論研究 33/34、p44-46

谷口孝夫『人間社会の哲学——フョイエルバッハとマルクス』1990、批評社

藤巻和夫『フョイエルバッハと感性の哲学』1990、高文堂

- 服部健二『歴史における自然の論理——フォイエルバッハ・マルクス・梯明秀を中心に』1990、新泉社
- 本多修郎『魔術的人間像の系譜』1990、以文社
- 亀山純生「フォイエルバッハの唯物論と女性原理」1990.01、季刊思想と現代 22、p79-92
- 細谷 実「フェミニズムと哲学」1990.01、季刊思想と現代 22、p28-40
- 川本 隆「フォイエルバッハの"diemenschlicheNatur"について(1)」1990.02、東洋大学大学院紀要 26、p91-102
- 柴田隆行「L・フォイエルバッハ日本語文献目録・追加1」1990.04、社会思想史の窓 71、p.18-19
- 鈴木伸一「フォイエルバッハと道元禅の思惟」1990.04、社会思想史の窓 71、p.13-15
- 村井久二『比較マルクス研究試論—弁証法的方法の問題』1990.05、日本評論社
- 岩切政和「フォイエルバッハにおける「人間の本質」について——主として『キリスト教の本質』第1章、第2章に即しつつ、彼の宗教批判の視点を吟味する」1990.06、久留米大学論叢 39(1)、p.150-136
- ブランドホルスト(桑山政道訳)『シュトラウスとフォイエルバッハの間の審判者としてのルター』の著者について」1990.09、社会思想史の窓 76、p.1-5
- 細谷 実「死の哲学的諸問題とフォイエルバッハ」1990.11、群馬女子短期大学紀要 17、p.117-132
- 河上睦子「フォイエルバッハのなかのカント——服部健二『歴史における自然の論理』を読む」1990.12、社会思想史の窓 79、p.1-8
- 川本 隆「今日のわれわれにとってのフォイエルバッハ——藤巻和夫『フォイエルバッハと感性の哲学』の現代的視角」1990.12、社会思想史の窓 79、p8-14
- 澤野 徹「国際フォイエルバッハ学会の設立とその後の動向」1990.12、社会思想史の窓 79、p.14-28
- 本多修郎『魔術的人間像の系譜』1990.12、以文社
- H・H・ブランドホルスト(桑山政道訳)『ルターの継承と市民的解放——フォイエルバッハとドイツ三月革命前期の研究』1991、新地書房
- 石塚正英『フェティシズムの思想圏』1991、世界書院
- 鈴木伸一「道元の超越的思惟とL・フォイエルバッハの宗教批判」1991、比較思想研究 18、p.107-111
- 半田秀男「人間と自然——L.フォイエルバッハの場合—2—」1991、人文研究(大阪市立大学文学部)43(4)、p257-272
- 川本 隆「フォイエルバッハの"diemenschlicheNatur"について(2)」1991.02、東洋大学大学院紀要 27、p29-40
- ラヴィドヴィッツ(桑山政道訳)「フォイエルバッハとショーペンハウエル」1991.02、社会思想史の窓 81、p.1-12
- 新木順子「フォイエルバッハにおける感性の復権」1991.03、人間文化研究年報(お茶の水女子大学)14、p51-62
- 斉藤 隆「ヘーゲルからフォイエルバッハへ——現代哲学の原点としてのヘーゲル哲学批判」1991.04、高島明他『学と真理』高文堂出版社
- 澤野 徹「ミュンヘン大学図書館所蔵L・フォイエルバッハの遺稿」1991.06、専修大学社会科学研究所月報 336、p.14-26.
- 富丘 聡「デューイとフォイエルバッハにおける「自然と人間」」1991.06、日本デューイ学会紀要 32、p61-66
- 藤田友治「自然史の思想について——服部健二『歴史における自然の論理』書評」1991.07、季報唯物論研究 38/39、p48-49
- 石塚正英「バルバロスとしての初期社会主義」1991.08、現代思想 19(8)、p.173-179
- 岩淵慶一「フォイエルバッハとマルクス」1991.09、立正大学文学部論叢 94、p.1-20
- 柴田隆行「現代の宗教改革者フォイエルバッハ——ブランドホルスト著『ルターの継承と市民的解放』(桑山政道訳)を読んで」1991.11、社会思想史の窓 90、p.1-5
- 石川三義「フォイエルバッハはシュライエルマッハー学徒か——石塚正英『フェティシズムの思想圏』を読む」1991.11、社会思想史の窓 90、p6-10
- 熊野純彦「書評『人間社会の哲学——フォイエルバッハとマルクス』(谷口孝男)」1992、哲学(北海道大学哲学会)28、p53-58
- 石塚正英「フォイエルバッハの現代性—— Sache(事象)と Bild(形象)との関係をめぐって」1992.01、理想 648、p.178-184
- 服部健二「フォイエルバッハの『死と不死に関する諸思想』について——シュライエルマッハー、ヘーゲルとの関係で」1992.01、立命館文学 522、p90-110
- 本田玄伯「エゴイズムと他者の問題」1992.01、社会科学論集 62、p9-25
- 鈴木伸一「道元の超越的思惟とL・フォイエルバッハの宗教批判」1992.02、比較思想研究 18、p.107-111
- 滝口清榮「ヘーゲル批判の思想圏——シェリング、バウアー、フォイエルバッハと疎外論」1992.04、石塚正英編『ヘーゲル左派』(法政大学出版局)、p48-72
- 渡辺憲正「フォイエルバッハの非哲学の哲学」1992.04、石塚正英編『ヘーゲル左派』(法政大学出版局)、p.15-47
- 姜 大石(フォイエルバッハの会編訳)「なぜ韓国でフォイエルバッハが求められるのか？」1992.05、社会思想史の窓 96、p6-11
- 亀山純生「現代宗教の前で哲学から考える」1992.09、歴史評論 509、p58-71
- ヨードル(暉峻凌三訳)『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』1993、柴田隆行

- 津田雅夫『マルクスの宗教批判』1993、柏書房
- 山田隆夫「社会と人間、2——マルクスとヘーゲルとフォイエルバッハ」1993、中京大学教養論叢 34(3)、p677-686
- 澤野 徹「L・フォイエルバッハの遺稿「日本の宗教」」1993.01、専修大学社会科学研究所月報 355、p.1-20
- 河上睦子「フォイエルバッハにおける「ルター」」1993.03、相模女子大学紀要 A 56、p91-105
- 服部健二「自我と世界の「断念」——カール・ダウプとフォイエルバッハの関係についての一考察」1993.03、立命館文学 529、p.115-133
- 澤野 徹・柴田隆行「日本におけるL・フォイエルバッハ研究」1993.10、専修大学社会科学研究所月報 364、p.1-21
- 細谷 実「自由についての哲学的諸問題とフォイエルバッハ」1993.10、社会思想史の窓 103、p.1-15
- 岡本宏正「唯物論と人間主義」1993.12、人文・社会科学(鳥取大学教育学部)44(2)、p.165-173
- 半田秀男「人間と自然——L・フォイエルバッハの場合—3—」1994、人文研究(大阪市立大学文学部)46(5)、p267-284
- 松丸壽雄「宗教批判の行方」1994.01、大峯顯編『神と無』(叢書ドイツ観念論との対話、5)、ミネルヴァ書房、p.240-276
- 河上睦子「「フォイエルバッハにおけるルター」について」1994.03、比較思想研究 20 p.113-116
- 河上睦子「死を知らぬ者——フォイエルバッハと現代」1994.03、相模論叢 6、p.136-154
- 川本 隆「ブロッホから見たフォイエルバッハ——〈隠れたる人間〉とフォイエルバッハ宗教哲学の逆説性」1994.03、東洋大学大学院紀要 30、p48-37
- 森 政稔「アナーキズムの自由と自由主義の自由——シュティルナーとフォイエルバッハのばあい」1994.04、現代思想 22(5)、p232-250
- 石塚正英「聖書の神話的解釈とフェティシズム——シュトラウスを論じてフォイエルバッハに及ぶ」1994.05、理想 653、p20-31
- 服部健二「自然の自己意識的本質——フォイエルバッハの美的世界観について」1994.05、理想 653、p.105-116
- 川本 隆「「人間の自然」再考——フォイエルバッハとブロッホ」1994.09、「社会思想史研究」18、p99-105
- 山口祐弘『意識と無限——ヘーゲルの対決者たち』1994.10、近代文芸社
- 安田忠郎『人間観の基底——マルクスからフォイエルバッハへ』1994.10、J C A出版
- 石塚正英・河上睦子・柴田隆行編『神の再読・自然の再読——いまなぜフォイエルバッハか』1995、理想社
- 半田秀男「「自然」の概念について」1995、「名古屋大学哲学論集」(名古屋大学哲学会)3
- 河上睦子「「人間主義」と「自然主義」——フォイエルバッハの自然宗教論」1995.03、相模女子大学紀要 58、p.1-14
- 服部健二「書評『神の再読・自然の再読』」1995.05.12、読書人 2083
- 田畑 稔「シュタルケとエンゲルスの「フォイエルバッハ論」」1995.05、杉原他、編『エンゲルスと現代』御茶の水書房、p89-122
- ケツペ(柴田隆行訳)『『フォイエルバッハ全集』編集の現段階』1995.06、社会思想史の窓 115、p6-11
- 柴田隆行「フォイエルバッハの事跡めぐり」1995.06、社会思想史の窓 115、p.12-14
- 鈴木伸一「フォイエルバッハの人間学と倫理学の基礎づけ」1995.06、駿河台大学論叢 10、p23-49
- 稲岡義明「書評『神の再読・自然の再読』」1995.08、季報唯物論研究 53/54、p88-91
- 亀山純生「“素顔のフォイエルバッハ哲学”の提示——『神の再読・自然の再読』」1995.09、「唯物論」69、p.146-147
- 柴田隆行「フォイエルバッハの哲学史著作の意義」1995.10、哲学 46、p.150-159
- 澤野 徹「L・フォイエルバッハにおけるドイツの宗教批判と宗教哲学」1995.11、専修経済学論集 30(2)、p73-107
- 半田秀男「人間と自然——L・フォイエルバッハの場合(4)」1996、人文研究(大阪市立大学文学部)48(8)、p453-477
- 服部健二「フォイエルバッハ『論理学・形而上学序論』について——ヘーゲルの主観的精神との比較」1996.02、立命館文学 543、p.45-63
- 河上睦子「フォイエルバッハとフェミニズム——「女性原理」と「ジェンダー論」」1996.03、相模論叢——自然・人間・文化 08、p.3-24
- 川本 隆「ブルックベルクとフォイエルバッハ」1996.07、石塚・柴田・的場・村上編『都市と思想家』Ⅱ、p.37-52
- 河上睦子『フォイエルバッハと現代』1997、御茶の水書房
- 柴田隆行「フォイエルバッハの哲学史著作の意義」1997、柴田隆行『哲学史成立の現場』弘文堂
- 藤山嘉夫「『貫徹された自然主義＝人間主義』の思想的境位」1997、『現代社会学とマルクス』アカデミア出版
- 亀山純生「フォイエルバッハの宗教観と中世浄土教の基本視点」1997.03、比較思想研究(比較思想学会)23、p35-38
- 八田隆司「フォイエルバッハとヘーゲル——その宗教と自然についての把握」1997.03、比較思想研究(比較思想学会)23、p.14-16
- 河上睦子「生殖の技術化と「身体性」の自由——フォイエルバッハの「女性原理」から」1997.06、

理想 659、S.72-82

表 三郎「甦るフョイエルバッハ——書評『フョイエルバッハと現代』」1997.10、情況第二期 8(8)、p.160-162

亀山純生「“神、なき時代の思想的—光源——近代知の解体者フョイエルバッハ——書評『フョイエルバッハと現代』」1997.10、週刊読書人

鈴木伸一「L. フョイエルバッハの法思想」1997.11、駿河台大学論叢 15、p.1-21

川本 隆「〈神なき人間〉はどこへ？」1997.10、月刊フォーラム

半田秀男「人間と自然——L. フョイエルバッハの場合(5)」1998、人文研究(大阪市立大学文学部)50、p.51-68

山辺知紀「河上睦子著『フョイエルバッハと現代』」1998、社会思想史研究 22、p.225-227

フョイエルバッハ(半田秀男訳)『理性論』1999.11、半田秀男『理性と認識衝動』下、溪水社

半田秀男『理性と認識衝動——初期フョイエルバッハ研究 上下』1999、溪水社

石塚正英「キリスト教の中の原初的信仰——マルクスを論じてフョイエルバッハに及ぶ」1999.01、理想

柴田隆行「革命の批判的傍観者フョイエルバッハ——1848年の書簡から」1999.01、情況 2-91、p.134-148

川本 隆「フョイエルバッハの『ライプニッツ論』における「物質」——「混乱した表象」の發展的意義」1999.03、東洋大学大学院紀要 35、p.127-138

寺園喜基『途上のキリスト論——「バルト=ボンヘッファー」の今日的意味』1999.06、新教出版社

アルチュセール(市田良彦他訳)『哲学・政治著作集 2』1999.07、藤原書店

バルト(井上良雄・小川圭治・吉永正義訳)『カール・バルト著作集 4 神学史論文集』1999.07、新教出版社

柴田隆行「フョイエルバッハとヘーゲル論理学」1999.08、ヘーゲル論理学研究 5、p.7-20

柴田隆行「フョイエルバッハ」1999.10、マルクスがわかる——アエラ・ムック 53(朝日新聞社)、p.102-105

和田隆子「フョイエルバッハの哲学改革(1)ヘーゲル哲学批判から感性主義へ」1999、常磐会短期大学紀要 28、p.89-100

石塚正英『歴史知とフェティシズム』2000、理想社

富村 圭「〈彙報〉ルートヴィヒ・フョイエルバッハの『思弁』との訣別——同時代の神学論争の視点から(一九九九年修士論文要旨)」2000、史学(慶應義塾大学) 70-1、p.135-136

藤山嘉夫『諸個人の生と近代批判の思想』2000.03、学文社

藤野一夫「フョイエルバッハ主義者ワーグナーに見る『愛と死』のドラマトゥルギー」2000、ワーグナー・ヤールブーフ 2000、p.82-101

柴田隆行「フョイエルバッハとヘーゲルの論理学(2)」2000.08、ヘーゲル論理学研究 6、p.27-44

石川 實「明治期におけるフョイエルバッハの受容とその系譜」2001、立正大学哲学・心理学会紀要 27、p.13-23

栗宗保輝・船尾出志「フョイエルバッハに関する第6テーゼにおける『人間の本質』の規定について」2001、教授研究 22(2)

柴田隆行「『フョイエルバッハ・テーゼ』とフョイエルバッハ」2001.07、情況第3期第2巻第6号、p.152-153

柴田隆行「フョイエルバッハとヘーゲルの論理学(3)」2001.08、ヘーゲル論理学研究 7、p.39-57

河上睦子「女性身体の復権とフョイエルバッハの再読」2001.09、社会思想史研究 25、p.28-32

川本 隆「フョイエルバッハの他者論の可能性——『ライプニッツ論』における alterego をめぐって」2001.09、社会思想史研究 25、p.55-58

柴田隆行「フョイエルバッハと啓蒙」2001.11、季報唯物論研究 78、p.6-13

フランチェスコ・トマソーニ(柴田隆行訳)「フョイエルバッハと啓蒙——歴史的再構成のために」2001.11、季報唯物論研究 78、p.14-30、42

川本 隆「自然感覚と観想的理性——ヨゼフ・ヴィニガー「フョイエルバッハ、ドイツ啓蒙家」に即して」2001.11、季報唯物論研究 78、p.31-42

片山善博「対立から統一へ——C・ヴェックヴェルト「キリスト教市民世界の危機——フョイエルバッハによる人間の新たな統一と共同の時代の基礎づけ」」2001.11、季報唯物論研究 78、p.43-52

中畑邦夫「フョイエルバッハの自然主義——ヨアヒム・カール著「ルートヴィヒ・フョイエルバッハによる自然主義の哲学への寄与」を評しつつ」2001.11、季報唯物論研究 78、p.53-60

村井久二『コントとマルクス——「コント=マルクス型発展モデル」の意義と限界』2001.12、日本評論社

木村 博「『自己自身を啓蒙する啓蒙』と感性的・身体的理性——ウルズラ・ライテマイアー『フョイエルバッハと啓蒙』に関して」2002、季報唯物論研究 79

柴田隆行「宗教批判と政治批判——フョイエルバッハの書簡から」2002.08、情況第3期第3巻第7号、p.194-205

石塚正英「身体論を軸としたフョイエルバッハ思想」2002.08、情況第3期第3巻第7号、p.218-227

木村 博「フョイエルバッハ——人間学の論理」2002.08、情況第3期第3巻第7号、p.228-237

服部健二「自然観をめぐって——フョイエルバッハとマルクス」2002.08、情況第3期第3巻第7

号、p.206-217

ライテマイアー(川本隆訳)「哲学の実現へ向けた青年ヘーゲル派のプログラムの今日的意義」

2002.08、情況第3期第3巻第7号、p.238-250

柴田隆行「フォイエルバッハとヘーゲルの論理学(4)」2002.08、ヘーゲル論理学研究 8、p.23-38

服部健二「『唯物論』の批判的検討」2002.11、季報唯物論研究 82、p.27-42

いいだもも「マルクス『フォイエルバッハに』をめぐって——降旗節雄『科学とイデオロギー』の振り分け方」2002.12、情況 3(10)

仲島陽一「ショーペンハウアーとフォイエルバッハにおける『受苦』と『共苦』」2003、国際地域学研究(東洋大学) 6、p.191-200

河上睦子「フォイエルバッハ研究事情——研究の協同性と公開性」2003.01、アソシエ 21 ニューズレター 45、p.2-4.

柴田隆行『フォイエルバッハは哲学史の再構築に寄与しうるか』2003.02、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(2)研究成果報告書、53p.

片山善博「他なるものをめぐって——フォイエルバッハの批判を受けて」2003.04、岩佐茂・島崎隆編著『精神の哲学者ヘーゲル』(創風社)第IX章、p.260-283.

河上睦子「フォイエルバッハの身体論(1840年代)」2003.03、理想 670、p.142-150

久保紀生「佐藤賢順と仏教的人間学(2)フォイエルバッハからマックス・シェラーへ」2003.03、大正大学総合佛教研究所年報 25、p.106-110

滝口清栄「もう一つの『ドイツ・イデオロギー』——「聖マックス」とシュティルナー・フォイエルバッハ」2003.04、情況第三期 4(3)、p.124-132

菅野孝彦「L・フォイエルバッハの人間観——共時態としての、外的世界と内的世界の結びつき」2004、総合教育センター紀要(東海大学総合教育センター)24、p.1-19

山之内靖『再魔術化する世界——総力戦・"帝国"・グローバルゼーション』2004.03、御茶の水書房

フォイエルバッハの会編『フォイエルバッハ——自然・他者・歴史』2004.03、理想社

深井智朗『超越と認識——20世紀神学史における神認識の問題』2004.08、創文社

柴田隆行「規範化と差異化——フォイエルバッハ言語論のために」2004.11、東洋大学社会学部紀要 42-1、p.61-73.

山之内靖『受苦者のまなざし 初期マルクス再興』2004.11、青土社

稲岡義朗「書評 フォイエルバッハの会編『フォイエルバッハ--自然・他者・歴史』」2005 季報唯物論研究 92、p.150-153

河上睦子「意志と幸福衝動——フォイエルバッハとショーペンハウアー」2005.03、相模女子大学紀要 68A、p.27-39

仲島陽一『共感の思想史』2006、創風社 [第11章 フォイエルバッハ——共感の神学と人間学]

川本 隆「神秘主義と質料志向——若きフォイエルバッハのヘーゲル主義とその離反」2007.04、哲学(日本哲学会) 58、p.163-176

川本 隆「神秘主義と質料志向について——紙上インタビュー」2007.06、フォイエルバッハの会通信 63

ライテマイアー(柴田隆行訳)『永続する変革 青年ヘーゲル主義からフランクフルト学派までの近代理論』序文 2007.06、フォイエルバッハの会通信 63

服部健二「フォイエルバッハ」2007.08、須藤訓任編『哲学の歴史 9 反哲学と世紀末』中央公論新社、p.46-99

河上睦子「フォイエルバッハの宗教批判論の再読」2007.08、アソシエ 21 ニューズレター、p.5-7

片山善博「新著『差異と承認—共生理念の構築を目指して—』について——紙上インタビュー」

2007.09、フォイエルバッハの会通信 64

ジーファーディング(柴田隆行訳)『連帯性と感受性 ルートヴィヒ・フォイエルバッハとリチャード・ローティを範とする対話的倫理の素描』序文 2007.09、フォイエルバッハの会通信 64

菅野孝彦・三宅光一「L・フォイエルバッハにおける人間観としての『我と汝の関係』」2007、総合教育センター紀要(東海大学) 27、p.99-109

辻康彦「論稿『富と自由』について——紙上インタビュー」2007.12、フォイエルバッハの会通信 65

菅野孝彦「L・フォイエルバッハ思想の意義と限界」2008、総合教育センター紀要

河上睦子「シンポジオン フォイエルバッハにとっての48年革命」2008、アソシエ 20

河上睦子「『マリア』についての人間学的考察 フォイエルバッハのマリア論を中心に」2008.02、人間社会研究(相模女子大学) 5、pp.13-32

柴田隆行「国際フォイエルバッハ学会・ヴェストフェーリッシュェ=ヴィルヘルム大学・ナポリ哲学研究イタリア研究所共催『フォイエルバッハとユダヤ主義 国際フォイエルバッハ学会シンポジウム』報告(上)(中)(下) 2008.04、09 フォイエルバッハの会通信 66-68

富村圭「国際学会研究発表「三月前期のユダヤ人解放から見た、フォイエルバッハの人間像」について——紙上インタビュー」2008.04、フォイエルバッハの会通信 67

柴田隆行「国際学会研究発表「フォイエルバッハと若きヘーゲルにおけるユダヤ教およびキリスト教の批判——人間的エゴイズムの意義」について——紙上インタビュー」2008.09、フォイエルバッハの会通信 68

河上睦子「フォイエルバッハ後期思想の再評価」2008.10、社会思想史学会第33回大会プログラム・報告集、pp.41-46

- 浅見洋「宗教批判の類型と意義:フォイエルバッハ、バルト、西田の宗教批判」2008.9、宗教研究 82-2、pp.317-340
- 河上睦子『宗教批判と身体論——フォイエルバッハ中・後期思想の研究』2008.10、御茶の水書房
- 石川實「明治期日本におけるフォイエルバッハ研究について——紙上インタビュー」2008.12、フォイエルバッハの会通信 69
- 神田順司「再訪:マルクスとユダヤ人問題(Nocheinmal:KarlMarxunddieJudenfrage)」要旨(「国際フォイエルバッハ学会シンポジウム「フォイエルバッハとユダヤ主義」(2008.3.27-30、Münster)」)
- 2008.12、フォイエルバッハの会通信 69
- 菅野孝彦「フォイエルバッハからボルノーへ」2009、総合教育センター紀要 29、pp.133-140
- 深井智朗「神学は神学を越えて神について語るができるのか——20世紀神学史の遺産と可能性」2009.03、宗教哲学研究 26、pp.1-18
- 河上睦子「新著『宗教批判と身体論——フォイエルバッハ中・後期思想の研究』について——紙上インタビュー」2009.04、フォイエルバッハの会通信 70
- 黒沢惟昭「疎外論をめぐって——紙上インタビュー」2009.09、フォイエルバッハの会通信 72
- 河上睦子「フォイエルバッハ『宗教の本質に関する講義』——身体論からフォイエルバッハ哲学を読む」2009.11、季報唯物論研究 110、pp.17-19
- 川本隆「書評河上睦子著『宗教批判と身体論——フォイエルバッハ中・後期思想の研究』」2009.11、季報唯物論研究 110、pp.145-148
- 滝口清栄『マックス・シュティルナーとヘーゲル左派』2009.12、理想社
- 川本隆「フォイエルバッハとヘーゲルの差異——ライプニッツ解釈をめぐって」2009.12、ヘーゲル哲学研究 15、pp.129-141
- 菅野孝彦「フォイエルバッハとニーチェ——内的世界の冒険者たち」2011.04、フォイエルバッハの会通信 78
- 河上睦子「フォイエルバッハの人間学の再解釈」2011.5、『人間にとっての都市と農村』(総合人間学会編、学文社)、pp.68-77
- 川本隆「研究ノート 『理性論』Ⅱ章 §11 の対訳」2011.06、フォイエルバッハの会通信 79
- 黒崎剛「ヘーゲル弁証法への根源的批判——「自然」の欠如をめぐるシェリング、フォイエルバッハ、マルクスの態度」2011.8、ヘーゲル論理学研究 17、pp.83-122
- 津田雅夫「新書『「もの」の思想——その思想史的考察』をめぐって——紙上インタビュー」2011.12、フォイエルバッハの会通信 81
- 亀山純生「共編著『〈農〉と共生の思想——〈農〉の復権の哲学的探求』——紙上インタビュー」2012.3、フォイエルバッハの会通信 82
- 石塚正英「自然災害と信仰をフォイエルバッハはどう関連付けたか」2012.3、フォイエルバッハの会通信 82
- 川本隆「ヘーゲルとフォイエルバッハを分かちもの——汎神論と理性の理解を巡って——」2012.3、東洋大学大学院紀要 48 文学研究科、pp.71-84
- 川本隆「フォイエルバッハのベーム受容とその批判——ヘーゲルとの対比で——」2012.6、実存思想協会編『生命技術と身体 実存思想論集 XXVII (第二期第十九号)』理想社、pp.101-118
- 川本隆「思弁的媒介から直接性へ——フォイエルバッハから見たデカルトの心身二元論——」2014.3、東洋大学大学院紀要 50、pp.57-70
- 柴田隆行「フォイエルバッハの実践 (1) ルーゲとの往復書簡から見えるもの」2014.8、『季報唯物論研究』128、pp.120-128
- 柴田隆行「フォイエルバッハの実践 (2) 不死信仰の秘密を暴く」2014.11、『季報唯物論研究』129、pp.110-117
- 柴田隆行「フォイエルバッハの実践 (3) エゴイズムの倫理」2015.2、『季報唯物論研究』130、pp.90-97
- 柴田隆行「フォイエルバッハの実践 (4) 自然科学と革命」2015.5、『季報唯物論研究』第 131、pp.150-159
- 富村圭「アルノルト・ルーゲのフォイエルバッハ受容:三月前期ドイツにおける教会論争の視点から」2015.7、『史学』85:1-3、pp.295-333
- 川本隆「書評:服部健二『四人のカールとフォイエルバッハ』汎神論的自然のアクチュアリティ 現代人にとって必読の高著」2015.11.12、『週刊読書人』
- 柴田隆行「フォイエルバッハの実践 (5) カール・グリュンの理論と実践」2015.11、『季報唯物論研究』133、pp.118-129
- シンポジウム「フォイエルバッハとヘーゲル——宗教をめぐる対話」2015.12、『ヘーゲル哲学研究』21
- 池田成一「中期フォイエルバッハのキリスト教批判におけるヘーゲルの継承と批判」pp.39-50
- 河上睦子「フォイエルバッハ後期思想の可能性——「身体」と「食」の構想」pp.51-63
- 川本隆「ヘーゲルの思弁と初期フォイエルバッハの汎神論」pp.64-75
- 滝口清栄「シンポジウム総括」pp.76-79
- 川本隆「超越から内在へ——若きフォイエルバッハは神をどのように解読したか」2016.4、『哲学』67 (日本哲学会) pp.186-200
- 柴田隆行「フォイエルバッハの実践(6) 幸福を求めて」2016.5、『季報唯物論研究』135、pp.130-139
- 「紙上インタビュー11:服部健二氏。四人のカールとフォイエルバッハ。レーヴィットから京都学

派とその「左派」の人間学へ。交渉的人間観の系譜」2016.6、『フオイエルバッハ通信』99、pp.1-5
服部健二「『自然の自己意識』としての人間」2016.8、『季報唯物論研究』136、pp.94-104
青柳雅文「書評服部健二著『四人のカールとフオイエルバッハ』『レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ』」、2017、『立命館哲学』28、p.109-116
【翻訳】ウルズラ・ライテマイアー「誤認された思想家から現代的思想家へ。ドイツ語圏における1965年から2015年までのルートヴィヒ・フオイエルバッハ哲学の受容」(1)～(5)(柴田隆行訳)、2017.9-1018.9、『フオイエルバッハ通信』104-108
川本隆「初期フオイエルバッハのルター論——宗教的人間の「発生的 - 批判的」解釈に寄せて」2018.2、『桜文論叢』96、pp.521-542
河上睦子「フオイエルバッハの『食の哲学』考——『供犠の秘密』を中心に」2018.6、『フオイエルバッハ通信』107
石塚正英「マックス・シュティルナーのヘーゲル左派批判(上)、2018.9、『フオイエルバッハ通信』108
藤澤秀紀「フオイエルバッハにとって神とは」2018.11.、東京唯物論研究会編『燈をともし』27、p.19-22